第2回

子育てひろば 0123育ちの詩（うた）

聞かせて！
子育てひろば・支援センターで
出会った
ちょっといい話。

子育てひろば0～3育ちの詩（うた）

いつでもおいで！　子育てひろばへ

扉をひらいた先は　あったかい日だまり
がんばらなくていい
出会いは自然とうまれてくる

ちょっとひと息ついて
その場にいることで
なんだかもっと子どもがいとおしく思えてくる

ひとりじゃないって素晴らしい
思いを分かち合えるから
自分から不思議と力が湧いてくる

たくさんの笑いと涙と心温まるエピソードが集まりました
子どもがいることで　つながれる幸せ
循環する不思議な縁が
地域を日本をもっと元気にするはずです

目次

はじめに …… 1
歌「また会いたいね」 ●作詞　小川志津子　●補作詞　新沢としひこ …… 4
はじめまして　●ひろりん（ペンネーム） …… 6
虹の扉　●パンダコパンダ（ペンネーム） …… 7
ふわり ゆらり 楽しいね♪　●清水 勢子 …… 8
栄町市場と「わくわく」　●夕暮（ペンネーム） …… 9
はじめての参加　●うふふ（ペンネーム） …… 10
ギラギラがキラキラに　●伊藤 夕佳里 …… 11
ランチで子育て　●角谷 優一 …… 12
たくさんの孫達との出会い　●塩谷 佑子 …… 13
刺激を受けて☆楽しいひととき…　●聡ちゃんの母（ペンネーム） …… 14
贈り物　●はっぴいママ（ペンネーム） …… 15
私も食べたいなぁ～　●はりりん（ペンネーム） …… 16
私も見ててくれてありがとう　●ちーのおかん（ペンネーム） …… 17
双子と出会った広場　●ふたごちゃん（ペンネーム） …… 18
ママたちがゆっくりできるひろば　●山縣 知子 …… 19
心を癒す栄養源　●まーちゃん（ペンネーム） …… 20
支援センター命です　●片桐 明美 …… 21
私と子ども三人を包みこんでくれたかなーちえ　●目取眞 愛由美 …… 22
明日もきらきら　●加藤 優子 …… 23
あるいたあるいた　●後藤 朋子 …… 24
愛あふれる広場　●岩根 美樹 …… 25
故郷　●山内 絵里奈 …… 26
ひとりじゃないさ（だいじょうぶ）　●鈴木 千恵 …… 27
「人」と「時」の架け橋に　●山田 美智子 …… 28
キリンの子育て　●藤村 メイ子 …… 29
子育てがきっかけの新世界…ひろば　●栗田 千佳子 …… 30

いちょうの木　●ぎんなん（ペンネーム） …… 31
父親として　●濱邊 聡 …… 32
パパの支援センターデビュー　●橋本 美穂 …… 33
ひろばはオアシス　●太田 泉 …… 34
私の楽しみ　●中山 つかさ …… 35
いつもありがとう支援センター　●松田 節 …… 36
うまれるつながるひろがる　●J・N（ペンネーム） …… 37
お兄さんと一緒に　●かーりん（ペンネーム） …… 38
中学三年生の宿題　●イチマルヨン（ペンネーム） …… 39
孤独から救ってくれた場所　●徐 江寧 …… 40
多国籍出前テントひろば　●清水 隆弘 …… 41
ここに行けば大丈夫！　●野原 直子 …… 42
わかちあい支え合って　●山野 華鈴 …… 43
はんぶんこ。　●大村 華奈 …… 44
「おひさまひろば」は出会いの場　●永野 美代子 …… 45
ひろばのひだまり～ありがとう～　●とこちゃん（ペンネーム） …… 46
ぐっすり　●伊知地 るみ …… 47
みんなが輝く親子の居場所　●松村 由美子 …… 48
また行こう　また遊ぼう　●みけ（ペンネーム） …… 49
また会いたいね　●小川 志津子 …… 50
あ～たのしかった♪♪♪　●よね（ペンネーム） …… 51
応募作品について …… 52
審査委員プロフィール・総評 …… 54
座談会 ～作品を通して伝えたい子育て家庭の声、支援者の関わり～ …… 57
楽譜♪「また会いたいね」　●作詞　小川志津子　●補作詞・作曲　新沢としひこ …… 62
編集後記 …… 63

作品の掲載順につきましては、作品のテーマなどを配慮し、事務局で順番を決めさせていただきました。順不同となっておりますことを、ご了承ください。

また会いたいね

作詞・小川志津子　補作詞・新沢としひこ

ただここにいて　一緒に過ごしてみよう
こどもたちは　いつの間にか　手を　取り合っているよ

がんばらなくてもいいんだよ
出逢いはつくるものじゃなく
気づけばあなたのそばにあるものだから

また会いたいね　また会いたいね　心をあたためよう
また会いたいね　また会いたいね　新しい明日のために

ただここに来て　見ているだけでもいいよ
こどもたちは　歌うように　翔ぶように走ってるよ

かかえていたいろんな思い
不思議にわかり合えるよね
同じ道を　迷ったり　笑い合ったり

また会いたいね　また会いたいね　悩みは　消していこう
また会いたいね　また会いたいね　新しい明日のために

また会いたいね　また会いたいね　心をあたためよう
また会いたいね　また会いたいね　新しい明日のために

はじめまして

ひろりん（岡山県）
ほのぼの子育てほっとはあと ちびっこひろば

どんな人がいるのかな…
子どもがあそんでくれるかな…
ずっと一人ぼっちだったらどうしよう…
なにか足に重りがついたみたい
やっぱり帰ろうかな…

―また二人だけの世界に帰るの？―
―さあ 勇気を出して！―

扉が見えて来た
心臓が飛び出しそうに鳴っている
ノブを持つ手が震える
子どもの顔も私と一緒不安気だ
私の服を持つ手に力が入る

「こんにちは」まぶしいほどの笑顔と明るい声が
迎えてくれた
「はじめまして」言えた！

体中の力が抜けて座り込んだ私の横で
子どもがあそんでる
私の顔を見て笑っている
かわいい…
「何ヵ月ですか？」
「十ヵ月です…」
私、久しぶりにパパ以外の人と話してる
笑ってる…

やっとママとして生まれることができたのかな…
「はじめまして」

虹の扉

パンダコパンダ（東京都）
NPO法人未来こどもランド

虹って…見えた時笑顔になって幸せな気持ちになったり、何か良い事ありそうって思いませんか？ それにラッキーって！ そこで私が利用している未来子どもランドの入口は私にとって「虹の扉」。

私は地方出身者で、現在東京に住んでいます。父親は遠く離れていて、母は病気で亡くしておりません。パパさんの親もなく、初子育ては、甘えられる人もなく、初めの二、三ヵ月毎日どうしていいのかわからず、ベビーと一緒に泣いていました。そんな時、虹の扉を発見！

正直、初めはドアを開けるのに勇気がいりましたが、少しでも心が救われたい気持ちから扉を開けました。入ってみると…スタッフの方の温かい一言「いらっしゃい」プラス温かい笑顔。心も体も疲れきっていて、誰かと話すことも少なかった私は、スタッフの方の笑顔を前に、次から次へと色々おしゃべりしていました。初対面なのに？ 不思議とお話しできました。それに育児の裏ワザまで教えてもらったり！ スタッフの方の良い人柄ですね。勇気をもって扉を開けてヨカッタ。生後三ヵ月の時扉を開け、もう八ヵ月が経ちました。週に二、三回利用して、いまでも育児相談や、愚痴をこぼしたり、ベビーの成長まで一緒に喜んでくれて、そうそう、念願だったママ友まで出来ました。

私がすごく綺麗な虹を見つけた場所。未来こどもランドの扉が私にとって「虹の扉」です。

最近、扉を開ける勇気がなくて、なかなか来られなかったと言う方が何人か。是非、是非、扉を開けてほしいです。きっと虹の扉の入口だと思うから。

何の知識がなくても、楽しく子育てをがんばれるのも、未来こどもランドという場所とスタッフの温かい笑顔のおかげです。素敵な虹の扉をありがとうございます。

ふわり　ゆらり　楽しいね♪

こすもすの家には、いつも笑顔がいっぱいあふれています。

清水 勢子（大阪府）
子育て広場　こすもすの家

栄町市場（さかえまち）と「わくわく」

夕暮（沖縄県）
那覇市つどいの広場　わくわく

迷路のように入り組んだ路地。多くの店が軒を連ね、様々な食べ物の匂いが混じり合っています。魚、肉、天ぷら、鰹節、コーヒー、島らっきょう、沖縄そば…。最初はこの匂いに圧倒されていましたが、今ではほっとする場所です。私と一歳七ヵ月の娘が通う那覇市つどいの広場わくわくは、そんな栄町市場の中にあります。

ここはガイドブックでよく「ディープな」と表現される地元客が中心の市場です。量り売りで値段がついていない、常連客が多く店主に声をかけづらい、という理由で、以前は近所に住んでいながらほとんど買い物をしたことがありませんでした。県外出身の私にとってはどこかよそよそしい所だったのです。

けれども、ひろばに通い始め、市場を歩くうちに印象が変わりました。すれ違う人達が娘に「かわいいさぁ」とよく声をかけて下さいます。近くに親せきもいない、ほとんど孤立した状態で子育てをしていた私には、こんな一言がとても有難かったのです。子沢山で子どもに優しい沖縄の人々。娘のおかげでやっと地域に溶け込めた気がします。

「わくわく」では市場の良さを伝えるための工夫がいっぱいです。市場内を散策したり、おたよりで市場祭りを知らせたり、市場の大きな地図とお勧めの商品をみんなで情報交換するボードもあります。

今ではお店の人に抱っこされたり、遊んでもらっている娘。沖縄では他人の子でも「ちゃん」をつけずに名前だけで呼びます。最初はびっくりしましたが、今では親しみがあって気に入っています。

娘は「わくわく」の先生方や市場の皆さんに育てていただいているとつくづく思います。また、市場で買い物をするようになり、地元の食文化や行事を知ることができました。親子にとって楽しく集える場であるだけでなく、地域と結び付けてくれた「わくわく」には感謝の気持ちでいっぱいです。

はじめての参加

うふふ（兵庫県）
三木市立児童センター

にぎった手に
ぎゅっと力をこめて
ママのうしろにサッと隠れる
可愛い瞳だけは
私を見ている

「ママといっしょだからね　大丈夫だよ」
可愛い瞳に　そう呼びかける

にぎった手を
ぎゅっと握り返して
わたしを見ながら　こどもに目をやるママ
やさしいにおいが
ふわっとしている

「よくきてくださいました」
やさしいにおいに　そう呼びかける

ドキドキするよね
はじめての場所
あなただけじゃない
みんな同じ

さあ　いっしょに
うたいましょ！
「グーチョキパーで何つくろう」

ギラギラがキラキラに

伊藤 夕佳里（神奈川県）
湘南台子育て支援センター

結婚を機に関西から関東に引っ越して三年が過ぎた頃、待望の子どもが誕生した。実家で里帰り出産をし、子どもを連れて関東の自宅に帰ってきたのは生後二ヵ月になってすぐ。家で子どもと二人きりの生活がすぐにつらくなった。

インターネットで、地域の子育て支援センターのことを知った。でも私は、女性週刊誌の読みすぎなのか、「ママ友」にマイナスイメージしか持っていなかったので、すぐには行かなかった。「恐怖の公園デビュー」「悪口、いじめ」それが私の「ママ付き合い」のイメージだった。

とは言っても、赤ちゃんを連れて出かける場所もなく、平日昼間の話し相手もいない。そんな毎日に我慢できなくなり、子育て支援センターに飛び込んだ。

「仲間はずれにされても無視しよう」
「ボスママには気をつけよう」
「関西弁をバカにされたら、言い返そう」

正直言って、最初は警戒心からギラギラしていたように思う。

しかしそこには、ボスママもいじめや悪口もなかった。その場にいるママさんが、和気藹々と子育ての話をしていた。私の警戒心はすぐに解け、すっかり支援センターの常連になった。

あの警戒心丸出しの支援センターデビューから二年半が経過し、赤ちゃんだった息子も三歳になった。今では公園遊びが中心になって、支援センターに行く機会は減ったが、息子の人懐っこくてお友達と仲良く遊べる性格は、支援センターに通っていたおかげだと思う。私にもママ友がたくさんでき、この夏はママ友の家族と私の家族で、花火をしたりプールに行ったり、楽しい夏を過ごした。

ギラギラだった子育て支援センターデビューだったが、今では息子とキラキラな毎日を過ごしている。

ランチで子育て

つどいのひろばの雰囲気になれてくると、お弁当を持参でやってきます。子ども用のかわいいおにぎりやウインナーなどがつまったものから、パンとジュース、市販の離乳食パックなどいろいろです。お母さん達のおしゃべりもにぎやかですが、はじめは落ち着かない子どももこんなにお行儀よく食べられるようになりました。子どもは真似ることが上手です。口で言うより見せることの大切さを教えられました。

角谷 優二（石川県）
親子つどいの広場まんま

たくさんの孫達との出会い

塩谷 佑子（石川県）
内灘町子育て支援センター・カンガルーム内灘

「ねえ、おばあちゃん、おばあちゃん、これやって」初めて言われた「おばあちゃん」の言葉。決して言われたくない言葉を、よそ様のお孫さんからかけられました。

保育ボランティアとして保育中の出来事でした。彼女は、私を年寄り扱いして言ったのではなく、ばかにして言ったものでもありませんでした。私に対する信頼と、安心と、親しみをこめて、私を「おばあちゃん」と呼んだのでした。彼女の素直で温かな心が、私の心に言い知れない温かさとなって、広がっていきました。彼女が放った「おばあちゃん」の言葉は、何て柔らかな、温かい響きなのでしょう。「おばあちゃん」とはそういう存在なのだと、気付かせてもらったのでした。

最近、子育て支援センターでの保育で、人見知りの時期の幼児を担当しました。

さみしくて泣いてしまったその子をだっこして、私の両手で彼女を包みました。

そして、声をかけました。

「いい子だね、あなたは一人じゃないよ。おばあちゃんが一緒にいてあげるからね。泣かないでおばあちゃんと一緒にいようね」

私の中から、彼女に対する温かな愛情が広がっていきました。彼女は私の心を理解してくれたように泣きやみ、やがて、私の体から離れてハイハイもし、そして、眠くなったら私の胸ですやすやと眠りました。

彼女は、私を信頼してくれたのでした。

今、私は経験豊富なおばあちゃんとして、今、経験を積んでいこうとしている、若いお母さんの脇に控えて、経験豊富な愛情を、後ろ姿で示していけたらいいなと思っています。

我が孫は、遠くてなかなか会えませんが、子育て支援センターでは、沢山の孫達と、優しさや、信頼や、愛情を共に感じ合う事ができます。そして、純真なエネルギーを与えてもらえて、心が若返る場でもあるのです。

刺激を受けて☆楽しいひととき…

祖父母よりも年配の方に抱っこしてもらえる機会なんて、なかなか無いので良い刺激になりました。色々な人にやさしく接してもらえるところなので、聡介も人にやさしく育ちそうな気がしました。

聡ちゃんの母（大阪府）
苅田南子育てはいはいクラブ

贈り物

はっぴぃママ（広島県）
千代田子育て支援センター「すこやか」
大朝子育て支援センター

新しい命を授かり越してきた北広島町。三ヵ月健診で二ヵ所の支援センターの先生から、「気軽に来て下さいね」と声をかけてもらった。初めはそんな所があるのか、でもまだ乳児だし連れて行っても仕方ないと思っていた。

我が子と向き合う毎日、これ自体が至福の時だと感じる一方で、会話を交わすのは夫だけ、引っ越ししたばかりで近所との繋がりもない。社会から取り残されたような思いを少し抱いていた。

そんな時、そうだ支援センターという所があったな、行ってみようと思い電話をかけた。初めて行った時は少し緊張した。だが利用する度に、支援センターから様々な贈り物を頂くことになる。

一つ目は、地域とのつながり。先生やお母さん方と子育てについて情報交換ができ、子ども自身も他のお子さんとの交流が持てる。小さな地域がそこにはある。

二つ目に、親子の居場所。第二子を妊娠中も親子を見守ってくださる温かい目があった。もう少しで兄になる上の子のちょっとした変化に気づき声をかけてくれたお母さんがいた。そんな場所があるだけで安心できる。

三つ目に、笑顔。先生そして子育て奮闘中のお母さんお父さん方の笑顔。なにより子ども達の愛らしい笑顔。みんなの笑顔が最高の贈り物。自分の心や身体が疲れている時その笑顔が特効薬となり、元気がでた。

この先、四つ目五つ目と、贈り物は両手いっぱいに増えていくことだろう。そして我が子が成長しいつの日か支援センターを卒業するとき、最後の贈り物を頂くことになる。それは支援センターでの大切な思い出。

最後に私達親子から支援センターに感謝の言葉を贈りたい。いつもありがとう。

私も食べたいなぁ〜

今日はみんなで「かき氷パーティー !!」
ママ達は作るのとおしゃべりで大忙し。
「私の分はまだなの？」
「早く食べたいよ〜」

はりりん（新潟県）
NPO法人マミーズ・ネット　子育て応援ひろば　ふぅ

私も見ててくれてありがとう

ちーのおかん（愛知県）
小山託児ルーム　すくすく広場

私と娘は、四ヵ月の頃からすくすく広場にお世話になっています。ワンフロアで広いので、後追いの頃もよちよちの頃も安心して遊ばせてやれて重宝しました。

さて我が家のお転婆娘ですが、一歳をすぎた頃からことあるごとに「いやっ!」と…早めの反抗期に入りました。それは日に日に激しくなり、癇癪も毎日爆発させていました。

本を読んだり育児相談に行ったりしましたが、聞く言葉は決まって、「自我の芽生え」「今だけだから」「みんな通る道」など意思表示できることは素晴らしい。特別私だけが辛い訳じゃない、そんな事知ってる。いつか終わるっていつ？　私は今辛いの！　そう叫びたいけれど、余計な理性が働いて、苦笑いで「今イヤイヤ期で大変なのよ〜」と言うくらいしかありませんでした。

夏のはじめ、娘は癇癪を日に四、五回はおこすようになり、私は逃げるようにすくすく広場に通い詰めていました。昼食持ちで朝から眠くなるまで、私も限界ギリギリでした。

そんなある日、すくすく広場の先生にこう声をかけられました。

「ママ大丈夫？　調子悪そうに見えるけど」

子どもの変化を見てくれているのはいつもだけれど、私のことも見ていてくれた。先生は母よりはだいぶ若いけど、私自身ももう母親なんだけど、遠く離れた母に心配して貰ったような気持ちになりました。

そして私の口からポロポロこぼれたのは、いつもと変わらないグチ。「今日はこの子こんな事で癇癪したの。こんな暴れ方したの。一時間も泣いてたんですよ」

でも一つ、いつもと違うもの、涙も一緒にポロポロ。

夏が終わり、娘のイヤイヤも収束し始めました。育児ノイローゼによる事件も時々聞きますが、あの時先生が声をかけてくれなかったら、ちゃんと泣いておかなかったら、私ももしかすると…。本当に、感謝でいっぱいです。

双子と出会った広場

ふたごちゃん（香川県）
NPO法人子育てネットくすくす　子育てひろば

私は双子のママです。二ヵ月の管理入院の末、双子を出産しました。

初めての出産、双子育児に寝る時間もなく、何をどうしていいのかわからない…不安とストレスに押しつぶされそうでした。そんな私を救ってくれたのが「子育て広場くすくす」です。ちょうど子どもが一歳になったときでした。私は不眠症になり、双子を連れて外へ出かける勇気も体力もなく、でも家にいると涙が止まらない。そんなとき、ふと立ち寄ったのが「子育て広場くすくす」でした。

広場のスタッフさんは「いらっしゃい」と笑顔で温かく迎え入れてくれました。そして「家にいるのが辛かったら、毎日来ていいからね。二人を連れて困った時は、駐車場まで迎えに行くから電話してね」と笑顔で見送ってくれました。私は、初めて広場を利用した日から毎日広場に行きました。午前中は広場に行き、帰ってから昼食をとり、昼寝をする。広場を利用するようになって、親子共に一日のリズムができました。

そんな毎日を過ごしていると、いつの間にか双子育児が楽しくなり、化粧をしてオシャレでもしようかな。という気持ちも芽生え「私のように、育児に不安を抱え、辛い思いをしている人を助けてあげたい」と思うようになりました。その想いは届き、今は親子で利用していた広場のスタッフをしています。

我が子はもうすぐ三歳になります。スタッフとなった今でも、休みの日には広場を利用しています。子どもたちが小学生になっても、中学生になっても、大人になっても、この広場の利用者でありスタッフでありたいと思います。そして、私たちを救ってくれたこの広場と共に成長していきたいと思っています。

ママたちがゆっくりできるひろば

子育て応援ひろば“ふぅ”は、「子育て中の人が子どもと一緒に来て、ゆっくりと自分の時間をもてる場所がほしいなぁ（ほしかったなぁ～）」と思うママたちが、自分たちでつくって運営しているひろばです。

ママたちがお茶を飲んだりおしゃべりしたりしているあいだ、子どもたちも“それなりに”子ども同士の世界で楽しんでくれているようです。

山縣 知子（新潟県）
NPO法人マミーズ・ネット　子育て応援ひろば ふぅ

心を癒す栄養源

まーちゃん（香川県）
NPO法人子育てネットひまわり　ひまわりはうすとことこ

子育てひろばって　どんなところ？
心を癒してくれる栄養源だよ。

かつて、私は悩んだ。
娘の言葉の遅れに。
育児書や小児科からは、「普通はもう、話せる頃だ」と。
そんな時、ひろばが元気をくれた。
「実は、うちの子もそうだったよ」と利用者ママ。
「今はしっかりインプットしている時期なんだよ」とひろばスタッフ。
そっかあ。そうなんだね。
私の子だけじゃないんだ。みんな、頑張ってる。
そう考えると楽になるもんだね。
ひろばは、いっぱい、いろんなパワーがもらえるところだね。そう思うよ。発見の場。

子育てしてると誰にだって
悩みはある。不安もある。葛藤もある。
孤独にもなる。ストレスもたまる。
親と子だけの生活、おそらく　枯れ果てる心になるだろう。
子育てひろば。
同じ悩みや不安をもつ親のネットワーク。
向き合う。支え合う。そして　ゆとり感。
そんな親が子どもを受けとめる心。
信頼する。安心する。安定する。
私はひろばとの出会い。
これからも大切にしたい。利用続けたい。
心が枯れ果てぬように。
足を運び、人とのつながりを保ちたい。
そして　もっとたくさんの人に
知ってもらいたい、心を癒す栄養源として。

支援センター命です

片桐　明美（山形県）
宮内乳幼児保育センター　地域子育て支援センター「すこやか」

「ママー、支援センター行っぐぞー」
と起きてくる次男の貴洋。
「まだ、支援センター、誰もいませーん」
と返しながら、ついにんまりしている私。
はやく行きたい一心で朝ごはんを食べて、大急ぎで着替え。一日が支援センター中心に組まれていく我が家の生活。
通いはじめたのは、貴洋が四ヵ月の頃。近所のママ友に誘ってもらったのがきっかけ。夏の日差しがまぶしい中、みんなでワイワイスイカ割り。新聞紙をしっかり握って、スイカをトントン叩く姿。生まれてはじめて見た雄々しい息子。先生が撮ってくださった写真は嬉しいコメントと共にアルバムに保管。絶対毎日通うと心に誓った日。あれから貴洋は幼稚園に入るまで通い続けることに。

ストレスを抱えた生活は一変。同じ楽しみ、同じ悩みを持つママや、親身に聞いてくださる先生に毎日会えることの有難さ。帰りの車中は毎日笑顔。帰宅後、すぐに明日が楽しみになる支援センター。
貴洋が生まれて、子どもは二人で十分だと思っていたのに、もう少し楽しい支援センターに通いたいともう一人。なんと念願の女の子。娘に出会えたのは支援センターのおかげ。生まれる前日まで支援センターに通って、四ヵ月でデビュー。お腹の中にいた時から遊んでいたのか、再会した喜びで終始笑顔の真祐美。
春はおひな様、夏は七夕と行事ごとに子どもと作った作品や思い出の写真。みんなでやった踊りや手遊び。一緒に過ごせた先生方やママ、お友達。みんな全部宝物。
すてきな支援センターに出会えて、本当によかった。支援センター大好き、支援センター最高、支援センター命。
先生、みんな、本当にありがとう。

私と子ども三人を包み込んでくれたかなーちえ

目取眞 愛由美（神奈川県）
神奈川区地域子育て支援拠点「かなーちえ」

四・三・二歳、三人の男の怪獣と、日々戦っている母です。

三男を出産し生後一ヵ月の頃、沖縄から横浜へ引っ越してきました。

二月のある寒い土曜日の朝、主人が体調を崩しました。子煩悩の主人は無理をするだろうと思い、三人を連れて外に出ました。

外に出たものの、行くあてもなくウロウロしている時に以前耳にした「かなーちえ」の事を思い出しました。電話をして、急いで電車に乗りました。不安を抱えながら扉を開くと「いらっしゃぁーい。あらー皆、あなたの子？（大きく笑った後）頑張ってるねー」と迎えてくれました。「上の子は、もうすぐ三歳ですけど、大丈夫ですか?」と質問すると「大きい子も大歓迎です」と言われました。

どうしても遊びは上の子に合わせての行動が中心で、寝返りを打ち始めた三男を連れての外遊びには無理を感じていました。三男に合わせて室内遊びを探すと、上の子の行動で他の子を怪我させるのではないかと思い、室内遊びを避けていました。

赤ちゃんコーナーへ三男をおろし、ごろごろさせながら上の子にも目をかけられて、私も腰を下ろすことができました。「あたたかい…」涙があふれそうになりました。

それから時々かなーちえを利用するようになりました。やっぱり三人の男の子はやんちゃでしたが、「子ども同士のけんかとトラブルも大歓迎」と言い、他のお母さん達も「そうそう」と笑顔を向けてくれました。

あれから一年以上がたち、私ももうすっかり「常連」です。外遊びの企画では、高橋先生から「遊びも育児も発想の転換が必要だ」と遊び以外の子どもへの接し方も学びました。あんなにめそめそしていた私も育児に自信がつきました。決して優しいお母さんではないけれど、怪獣三人にとっては「最高のお母さん」を目指そうと思い、時々？　火を噴き爆笑しながら毎日戦っています。

明日も　きらきら

加藤 優子（東京都）
大田区子ども家庭支援センター　キッズな洗足池

ひろばのドアに　すんでいる
みずいろゾウは　みているよ
かがやく瞬間　うれしい笑顔

ほらほら　今日も　かわいい声
おはよう　おはよう　みずいろゾウの　お鼻をつつく
タタタタタ　ひろばの真ん中　キョロキョロキョロ
　あった　あった　ぼくのおもちゃ
　いたよ　いたよ　ぼくのおともだち
　いつものように　遊んでいるよ
ボールがコロコロ　見つけたね
笑顔が　あふれて
気持ち　わくわく

あらあら　今日は　なみだ声
えーん　えーん　みずいろゾウの　お顔をたたく
ちがうちがう　ひろばの入口　イヤダイヤダイヤダ
　だいじょうぶ?　いつものおもちゃ
　いっしょに　あそぼ　いつものおともだち
　心配そうに　見に来ているよ
ボールがコロコロ　見つけたね

涙が　止まって
笑顔　にこにこ

おやおや　今日は　初めての声
ドキドキ　もじもじ　みずいろゾウに　背中をあてる
ジーッとジーッと　ひろばのすみっこ　まだまだジーッ
　はじめまして　楽しいおもちゃ
　コレ　どうぞ　楽しいおともだち
　よろしくねって　待っているよ
ボールがコロコロ　見つけたね
心が　とけて
ママも　にっこり

そろそろ　今日も　帰ろうー の声
バイバイ　バイバイ　みずいろゾウの　お耳をなでる
いっぱい遊んだ　ひろばのあちこち　じゃあねまたね
　楽しかったね　ないないおもちゃ
　また　あそぼ　バイバイおともだち
　みんなで見送り　集まっているよ
ボールもコロコロ　見つけたね
おててを　ふって
心　きらきら

ひろばのドアにすんでいる
みずいろゾウは　知っているよ
かがやく瞬間　うれしい笑顔

あるいた　あるいた

1歳を迎えたばかりのゆうとくん。
支援センターの幸子先生とあんよの練習。
なんと、ゆうとくんのお母さんは、幸子先生の教え子さん。
親子二代に渡り、成長に関わっていけることを、先生は幸せに
思うそうです。

後藤 朋子（熊本県）
小国町子育て支援拠点「カンガルーのぽっけ」

愛あふれる広場

岩根 美樹（神奈川県）
伊勢原市子育て支援センター「つどいの広場」

私の娘は、一歳九ヵ月でやっと歩きました。
体は健康でしたが、娘より後に生まれた子ども達が次々と歩き始めていると、歩ける前まで不安は募るばかりでした。
つどいの広場には、一歳五ヵ月の時から通っています。歩き始めた頃でも、そこではハイハイや伝い歩きで動いていました。しかし、ある時、少し先のテーブルに向って、突然ヨチヨチと歩き出しました。左右にゆらゆら揺れながら、数歩目でテーブルに手をつきました。
「あ、一人で歩いたよー」
側にいたスタッフが驚き、すぐ、みんなに知らせていました。
「よかったねー」
と、みんなが拍手をして喜んでくださいました。目を赤くして、泣いてくださる方もいました。

わずかな時間しか一緒に過ごしていないのに、そんなに感動してくださって、とても嬉しかったです。
考えてみると、みんなにお世話になっていました。娘が歩けない、という不安を持ちつつも、アドバイスをもらったり、慰めてくれたりしたおかげで、私も娘も、心が元気であり続けたのだろうと思います。
広場では、たくさんの愛があふれていたのです。

故郷

山内 絵里奈（千葉県）
館山市元気な広場

「子育ての故郷」私にとって元気な広場はそんな場所でした。

私には四歳、二歳、四ヵ月の三人の子どもがいます。上二人には、ここでたくさんの成長を見せてもらう事ができました。

長男が初めて広場に来たのが二歳七ヵ月。それまで大勢のお友達と関わる事なんてほとんどありませんでした。自分本位な遊びからまだまだケンカも多いけれど、一緒に遊ぶ楽しさを知ったり、お友達との関わりの中でおもちゃの貸し借りが出来る様になったり…。幼稚園にすんなりなじむことが出来たのもここでの体験があったからだと思っています。

次男は、家では一番甘えん坊なのですが、広場に行くと自分からは私の所にほとんど寄って来ません。六～七ヵ月頃から来ているので、広場は安心できる場所なんだと思います。積極的に大勢の子の中で楽しく遊んでいる姿をたくさん見ることが出来ました。子どもの成長においてはなくてはならない場所だったと言えます。

しかし、この場所が一番必要だったのは私だったと思っています。顔見知りのママやスタッフの方々に子育て、家庭内での悩みを聞いてもらったり、時には色々な事に行き詰り、スタッフの方々の前で涙してしまったこともありました。そんな私を、真剣に受けとめてくれたのもスタッフの方々でした。あの時は本当に嬉しかったし、心から救われました。そんな時間が私にとって、とっても大切な時間でした。今、私が日々に追われながらも息子達と笑顔で過ごせているのは広場での思い出があるからです。

今は、なかなか行けなくなってしまったけれど、私達を成長させてくれた故郷には、いつでも帰って話を聞いてもらえる！　そんな想いがあるからこそ、新たな土地でも前向きに頑張っていこうと思えるのです。

ひとりじゃないさ（だいじょうぶ）

鈴木 千恵（静岡県）
袋井市中央子育て支援センター　カンガルーのぽっけ

初めてママになった日を、私はきっと忘れない。
我が子を抱いた感動を、私はきっと忘れない。
赤ちゃんってかわいいな。
ちっちゃなおててに夢をにぎって。
赤ちゃんってかわいいな。
ほっぺをさわればあふれる笑顔。
だけど赤ちゃんいそがしい。
泣いて、笑って、おっぱいのんで。
だから…
新米ママはしあわせといっしょに不安も抱いている。
だけど…
ひとりじゃないさ大丈夫。昨日の不安も今日は喜び。
ひとりじゃないさ大丈夫。眠れぬ夜もいつかは終わる。
ひとりじゃないさ大丈夫。きっと来るよ誰にでも
悩んだ日々を笑えるときが。

一緒に悩んで、一緒に笑う。親子で友達うれしいな。
我が子を通して知り合えた、大人になってからの友達。
そんな友達作る場所、あなたの近くに支援センター
そんな友達できる場所、きっとみつかる支援センター
新米ママのはじめの一歩、行ってみようよ支援センター
みんな…
新米ママはしあわせといっしょに不安も抱いている。
だけど…
ひとりじゃないさ大丈夫。昨日の不安も今日は喜び。
ひとりじゃないさ大丈夫。眠れぬ夜もいつかは終わる。
ひとりじゃないさ大丈夫。きっと来るよ誰にでも
悩んだ日々を笑えるときが。
誰もがみんなしあわせといっしょに不安を抱いている。
だけど…
ひとりじゃないさ大丈夫。昨日の不安も今日は喜び。
ひとりじゃないさ大丈夫。眠れぬ夜もいつかは終わる。
ひとりじゃないさ大丈夫。きっと来るよ誰にでも
悩んだ日々を笑えるときが。

「人」と「時」の架け橋に

山田 美智子（神奈川県）
西区地域子育て支援拠点　スマイル・ポート

「うちのやつが、あんまり話題にするもんだから、どんな所か見てみたくて」

初めてのひろばにちょっと照れくさそうだったお父さん。手を引く子どもに促され、一時間も経たないうちに、すっかりリラックスして、ひろばで家族の時間を過ごしています。

「今日は私の母も一緒です。下の子のお産の間、こちらにお世話になると思って」

二人目の出産を控えたお母さんは、おばあちゃんに、ひろばの案内をしています。

母と子から、父、祖父母へと、ひろばが家族みんなに拡がっていくことを、とても嬉しく感じています。

おばあちゃんを交えての親子三代での会話からは、お母さんの子ども時代の様子も垣間見え、会話に花が咲きます。時には子育て真っ最中でもある私自身が、おばあちゃんから励まされることもあります。人と人がつながることの深みが、一層心に響き渡ります。

子どもを真ん中に、ひろばで色々な世代が時間を共有することは、人と人、そして「時」をもつなぐことなのだと思います。子育ては単に次の世代を育むだけではなく、母として、父として、一人の人間としての「時」を育んでいくことでもあります。そこに、多くの人々と色々な世代が加わると、「時」はさらに多彩に、豊かになります。ひろばが、人と人とをつなぎ、豊かな時を育める架け橋となるように、出会いと、一日一日を大切にしたいと思います。

『ドアを次の人の為に開けていられる人になりなさい』

高校を卒業する時に先生から頂いた言葉の本当の意味を、二十年経った今、やっとわかり始めたことに気付いた私です。

キリンの子育て

横浜・野毛山動物園の飼育員さんが、キリンの赤ちゃんの子育てのお話で、スマイルひろばへ来てくれました。以前亡くなった別の赤ちゃんの頭蓋骨や毛皮も持ってきてくれました。

キリンのママのお乳が出なかったので、焼酎4リットルのボトルに人間の赤ちゃんの乳首をつけて哺乳瓶の出来上がり。1回に2リットルをなんと30秒で飲んでしまうそうです！

それにしても、キリンの頭蓋骨にママも子どもたちも興味しんしん。

秋には、大きくなったキリンの赤ちゃんに会いに、みんなで野毛山動物園へ行くことになりました。

藤村 メイ子（神奈川県）
西区地域子育て支援拠点　スマイル・ポート

子育てがきっかけの新世界…ひろば

栗田 千佳子（神奈川県）
おやこの広場びーのびーの

私達夫婦の会話に「おやこの広場びーのびーの」の話題がない日は無い。それくらい、ひろばは我が家の生活の一部となっている。

娘が六ヵ月になったころだったろうか。首もすわって、そろそろ外出でもしたいなぁ…でも、人ごみに連れて行くのはちょっと…と、娘と二人きりの外出に乗り出せなかった私。ある日、広報紙でひろばの存在を知った。ほのぼのした年齢様々な親子の写真つきだった。家から近いこともあり、これは行ってみる価値あり！　と冒険気分で一歩踏み出したのだった。

いざ行ってみると、スタッフさんもひろばのお友達も初めて会うような気がしないくらいフレンドリーに温かく迎えてくれた。ここに居てもいいみたい、ってホッとした。二十四時間子育てで疲労困憊だった私は、涙が出そうなくらいうれしかったのを覚えている。小さいころから、人や環境に慣れ親しんでおいたほうがいいかな、と娘の為を思い通い始めたひろば。今となっては、私の心をリセットしてくれる場所となった。これは最も身近な主人にも目に見えて分かったようだ。イクメンの主人も時間があればひろばでの遊びに参加。こうしてひろばは我が家の別邸となった。

一日中、娘と二人きりで居るのではなく、ひろばに来てよかった、と思うことがよくある。一歳になった娘は、人物・状況を冷静に観察するため、つい真剣な顔になってしまう。私に言わせればただの「無愛想」だが、これをひろばのあるスタッフさんは「クールビューティー」と言い、あるママさんは、「笑顔を安売りしないのはいいことよぉ～」なんて言ってくださる。そう、ひろばに来ると、娘、時には私自身のことまでもが別の角度で見えてくるのだ。我が家はひろばに成長させてもらっている。そしてまた今日も、どんな発見があるかしら、誰に会えるかしらとワクワクしながらひろばに足が向かう♪

いちょうの木

ぎんなん（福島県）
せのうえ子育て支援センター

ぼくは　ちいさないちょうの木
ぼくが　たおれないように
おじいさんが　ささえをつけてくれたんだ
ぼくが　おおきくなるように
おばあちゃんが　お水をかけてくれるんだ

ぼくの枝に　ことりがとまったよ
おかあさんが　あかちゃんをだっこして
ことりのうたを　ききにきた
ぼくのはっぱに　かみヒコーキがのっかった
おとうさんが　こどもをかたぐるまして
かみヒコーキをヒョイと　とった

ぼくは　ちいさないちょうの木
でも　きのうよりは　おおきいよ
みんなが　おとなになったとき
ぼくは　もっともっとおおきくなって
みんなも　ともだちつれてきて
ぼくのまわりには
すてきなひろばができるだろう
たのしみだなー

ぼくは　ちいさないちょうの木…

父親として…

濱邊 聡（千葉県）
千葉市花見川子育てリラックス館

父親としてできる限り育児に参加し、子どもと触れ合う時間を大切に過ごしたい。そんな思いから利用し始めたのが、「花見川子育てリラックス館」。夕方から夜にかけて仕事をしている私は、午前中に子どもと一緒にここで過ごすことが、ほぼ毎日の日課となりました。当初は女性と子ども達だけの環境に中々馴染めずにいた私も、スタッフの方々や来館者の皆さんとの会話も少しずつ増え、ここに集まる子ども達とも自然に楽しく遊べるようになってきました。

そして現在では、月に一度「おはなしのなる木」という、父親による絵本の読み聞かせ会を開く程にも…。そんな子ども達との交流や、スタッフの方々、来館者の皆さんとの関わりの中で、何かを学び成長してきたのは、子ども達よりもむしろ、親である私自身だったかも知れません。そんな私の現在の目標は、保育士の資格を取ることです。近い将来、児童の福祉に携わり、子育ての支援などを通して、社会に貢献していきたい、そんな思いも理由の一つではありますが、実は父親としての自分自身を戒める為でもあります。日頃、子ども達を連れて出歩いていると、何かと良い父親として見られがちな私。でも、実際には、イライラを募らせてガミガミと子どもを叱ってしまうこともしばしば。決して理想的な父親を目指している訳ではありませんが、父親としての自分自身としっかり向き合っていけたらと考えています。

現在、三人の子ども達の父親である私。はじめてリラックス館へ連れて行った長男も、今年で七歳になりました。そして、私の父親としての年齢もまだ七歳になったばかり…。まだまだ未熟な父親ですが、これからもスタッフの方々からの支援や、来館者の皆さんと、その子ども達との交流の中で、自己研鑽に励んでいきたいと思っています。

パパの支援センターデビュー

いつもはなかなか足を運んでくれないけれど、この日は「お父さん講座だからパパたちもたくさん来るよ」という言葉につられ、念願の？！　るーえんデビュー !!

「カプラも楽しかったし、また来ようかな」とパパがひと言。

ママの作戦は大成功 !!　また３人で遊びに行こうね！

橋本 美穂（埼玉県）
新座市栄保育園地域子育て支援センターるーえん

ひろばはオアシス

太田 泉（福井県）
福井県民せいきょう　ハーツきっずはるえ

ママの育休明けと同時に始まった私の孫守り。二人の子育て経験があるというものの、最近の育児法は!?戸惑うことばかり。それでも周囲の「孫守りは大変」の声をよそに、自分なりに悪戦苦闘しながらも楽しく有意義な毎日を過ごしていました。

でも、いつのまにか、肩に力が入り過ぎていたのでしょう。少しばかり、疲れが出てきた頃、まとわりついてきた孫の右頬に、火を止めたばかりのみそ汁の鍋が…。「ギャーッ」と泣き叫ぶ孫と取り乱し半狂乱になっている私。すぐさま、救急車で医大へ。

幸い傷跡も残らず、一ヵ月ほどで完治しましたが、自責の念にかられ、落ち込み、すっかり自信を失くしてしまいました。

人伝に、毎日の様に通っていたひろばの先生が、急に現れなくなった私達をとても心配してくださっていると聞き、傷跡が目立たなくなった頃、人目をはばかりながら、再び訪問した時のことです。

「来てくれてありがとう」「おばあちゃん、辛かったでしょう」「せっかく、来てくれたんだもの、ゆっくり遊んでいってね」と終了時間になっているにもかかわらず、私達にひろばを開放してくださったのです。久々に、明るく楽しそうにはしゃぐ孫の姿に、私の心も自然と軽くなっていきました。

このひろばで、私達は、たくさんの元気と勇気をもらい、多くの事を学びました。優しく和やかなこのひろばが、これからも頑張るママ達のオアシスであるよう祈ります。そして、決して子育て上手とは言えない私ですが、『ご恩返し』に何か、自分らしくお手伝い出来ないものかと考えています。感謝をこめて。

私の楽しみ

中山 つかさ（静岡県）
掛川こども園 子育て支援センターあいあい

主人とのデート。
みんなには内緒。
いつもより濃いめの化粧し、勝手に主人と同じ色の服着て。
子一人ずつ連れ、後でねと、一緒に家を出る。
待ち合わせは、支援センター。

いつもありがとう支援センター

松田 節（山形県）
おおやま子育て支援センター

「お母さん、ゆっくり休めた？」
と優しい先生の声。私は支援センターのピンクのソファで目が覚めた。子ども達を連れて来ているのに、うっかり眠ってしまったのだった。四十代での双子育児は、時折急激な睡魔に襲われる。

慌てて飛び起きると、ソファの前には授乳用のついたてがあり、自分を隠してくれていた。その向こうでは先生方とキャッキャッと遊ぶ我が子の姿。ホッとすると同時に、感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

私は家事が一段落すると、子ども達を連れてセンターに向かう。家では、ゆったり一緒に遊んだり話しかけたりなかなか出来ない。しかし、センターに行くと先生方が名前で呼びかけ、「走るの早くなったね」「おもちゃどうぞって出来たね」と嬉しい変化を見つけ、共感してくれる。元気に動き回る子ども達を見て、私もホッと一息「子育てっていいな」と感じる心の余裕を取り戻すのだ。

共働きが多いこの地域で、長く仕事を休んでいる自分に焦りを感じることもある。「いつ仕事に復帰するの？」と聞かれると、今の時間が認めてもらえていないような悲しさと、計四人の子育てと仕事を両立していく不安で心が揺れる。若いママさん達の中で浮いている気もするし…。

そんな悲観要素と疲れがたまり、ある時涙が流れて止まらなくなった。センターの先生に話を聞いてもらった。

「お母さん、頑張ってるよ！」「みんなの手を借りたり、美容院行ったりして休んでいいんだよ」ゆっくり話を聞いてくれ、先生自身の子育ての話もしてくれた。最後には笑って、お茶を飲んで心が軽くなっていた。

泣いたり眠ったりのうっかりママ。肝っ玉母ちゃんへの道のりは遠い。でも、私には支援センターという心強い場所がある。子育ての仲間や先生方と語らいながら、ゆっくり子どもの成長を見守っていきたい。

うまれるつながるひろがる

J・N（石川県）
NPO法人おやこの広場あさがお　親子よろこびの広場あさがお

広場のことを知ったのは、今の高校に配属されて二年目の春だった。

向い席の先輩のところに案内が届いていた。近所に出来たNPO法人だという。のぞきこんで「あっ」と声をあげてしまった。写る笑顔の中に、見知った顔をみつけたのだ。

聞けば広場でボランティアをしているという。自分の子育てを通して広場と出会い、今に至ったそうだ。広場で子育ての苦楽を分かち合うこと、広場を通して社会とつながっていること、広場ボランティアとして誰かの役に立っていることを次々と語る声から笑顔があふれていた。

しばらくして、勤める高校から総合学習の職場体験先として、教え子達をお願いすることになった。最初はおっかなびっくり、最後には汗だくの笑顔の生徒を、こっそりと見守る立場になった。

そうして数年たち、私は私の中に新しい命を授かった。産前休暇に入り広場に顔を出した。マタニティからぜひにと誘われていたのだ。なんとも不思議な気持ちで足を踏み入れた。今は母としてここにいるのだ。

出産後は娘を連れて通った。夜泣き対策やら小児科情報を仕入れた。邪魔されず熱いお茶をふうふうして飲める椅子があった。娘は一つ上の子を追い、歩いた。

そして今、二度目の育児休暇を得て広場にきている。友人に誘われた読み聞かせボランティアも続いている。つい最近、母としてやってきた教え子と出会った。職場体験は今も続いている。育休のあける来年にはまた見守る立場となるだろう。

ここは不思議な場所だ。私はここで母という新しい自分と出会った。ボランティアという新しい社会とのつながりを得た。教え子達はここで幼子の温かさを知り、やがて母となり、父となり帰ってくる。すべてがつながっている。くるくると人の輪が孤を描く。命の輪がつながっていくのだ。

お兄さんと一緒に

夏休み、ボランティアの高校生が広場に来てくれました。元気な 2 歳児はお兄さんのあとを追いかけて、ダイナミックな遊びを楽しみました。

「今度はいつきてくれるんですか？　家に帰ってパパにいっぱいお話してました」

お兄さん達も「子どもはとても元気があって、疲れたけれど可愛かったから、ボランティアをやってよかった」と話してくれ、いろいろな人とふれあうことって大事だと思いました。ママ達、我が子の将来の姿が重なって見えたのかな。

かーりん（千葉県）
市川市二俣親子つどいの広場

中学三年生の宿題

イチマルヨン（神奈川県）
港北区地域子育て支援拠点「どろっぷ」

中学三年生の息子が夏休みの家庭科の宿題で幼児を観察するという。幼児を観察することによって幼児に関心を持ち、関わりあいについて考えるのが課題の目的だそうだ。それならば、彼が幼稚園の頃から、私が手伝ってきたひろばのボランティアをしてみるよう勧めた。中学三年という大人子どもが何を思うのか、粗相はないか…と親として多少の心配も持ちながら、ひろばのボランティアに送り出した。

ひろばでの活動をまとめた宿題には、「よくここで可愛がられていた思い出があるんですが、今回はその逆の立場だったんですけど、すぐに子ども達と溶け込むことができました。この経験は将来自分が親になったときにも役立つと思いますし、絶対に生かせると思うので覚えておきたいと思います」と記していた。

将来自分が親になったとき？…　笑止千万！　と母の立場で思いつつ、よく可愛がられたという言葉には、実のところ、胸にせまるものがあった。私がひろばを手伝っている間、彼はひろばに居合わせた、たくさんの人達に可愛がられながら育てられてきたとしっかり記憶して育っていた。なんと君は幸せ者だったのか！

スタッフとして活動の中で大事にしているのは「みんなで子育て」ということであっても、日々、ひろばに訪れる小さな子ども達は、「みんなで子育てをしているね～」と喜んだりはしてくれない。けれど、何年かたったときこうやって覚えていてくれているんだ！　ということを、まさかわが子から伝えられるとは思ってもいなかった。

母としても、スタッフとしても、うれしいできごとだった。

孤独から救ってくれた場所

徐 江寧（埼玉県）
新座市立栄保育園地域子育て支援センターるーえん

私は、日本に来てから今年で十一年目になります。留学生と会社員の生活を経て、今はお母さん業に挑戦する大舞台に立っています。

長男を中国の実家で出産し、日本に戻ってきたのは、子どもが五ヵ月の頃でした。異国で初めての子育ては、とても不安で心細く感じていました。初めに感じた日本と中国のギャップは、日本の子どもの数が少ないことです。外へ散歩に行っても、同じぐらいの赤ちゃんを見つけられないし、とてもショックを受けました。日本の子育て事情をまったく知らない私は、子どもと一対一で、家で過ごすのが当たり前なことだと思っていました。

ある日、偶然に知り合ったお母さんに「一緒にるーえんに行こう」と誘われました。この誘いで、私は孤独から救われることになりました。るーえんに来て、最も感動したことは、同じく子どもを育てているお母さん達が、友達みたいに育児や日常生活・世間話などを、気兼ねなく話し合っていたことです。それに、ママ達が話しているとき、スタッフの皆さんが子どもの面倒をみてくれます。ママは安心できるし、子どもも親以外の大人と接する事ができるので、とても嬉しく思います。また、長男の夜泣きの時期や、指しゃぶり・卒乳・二歳のイヤイヤの時期などなど、るーえんのスタッフの皆さんや、周りのママ達に、慰められ、励まされ、悩みを一緒に考えて頂き、大変御世話になりました。

次男が生まれた後も、みんなで子どもの成長を喜んでくださって、本当に嬉しく思っています。今まで育児をしてきた生活の中で、るーえんは本当に、掛け替えのない存在です。私にとって日本に、るーえんのような素晴らしい「実家」が存在していることを、とても幸せに思っています。そして、るーえんでの体験と学んだ事を中国の方々にも伝えて、日中の文化交流に少しでも貢献できたらいいなと思ってます。

多国籍出前テントひろば

多国籍のおともだちとの交流も楽しいですね。

～出前テントひろばより～

清水 隆弘（三重県）
北勢子育て支援センター　すこやかランド

ここに行けば大丈夫！

野原 直子（沖縄県）
石垣市子育て支援センターこっこーま（大川保育所内）

夏休みに入り、朝から大雨が降ったり止んだりと落ち着かない天気。「よく降る雨だね」とお母さん達は雨の晴れ間に支援センターに来れたことにほっとした表情をして外の雨をながめていた。

「ガチャガチャ」と外で鍵を開けようとする音と女の子の「あけてー」という泣き声にちかい声がするので、何事かと思い玄関の方に行くと、ずぶ濡れになった小学生の女の子が、男の人と一緒に入ってきた。

「あれ？　女の子見たことある。あっ！　花子ちゃんだ」事のなりゆきを聞くと、小学校の図書館で本を借りた帰り道、前が見えなくなるくらいの大雨が降り、家まで帰るのが怖くなり、途中にある支援センターに寄ったけど、入口玄関の鍵が高すぎて手が届かないのを必死で開けようとしている所を、通りがかりの人が鍵を開けてくれたのだった。

二年前に支援センターを卒業した花子ちゃんは、仲良しのお友達が私立の幼稚園に通うため、一足先に支援センターを巣立ってしまったので、淋しい表情でいる姿が印象に残っていた女の子だった。

お誕生会、川あそび、おゆうぎ会といろんな行事に参加して、自分が支援センターでは最年長者なんだと意識する場面をたくさん経験して、卒業式では堂々と自己紹介をしてくれた。そんな花子ちゃんの姿を見て「成長したね」とお母さんと話をしていた事が懐かしく思い出された。

支援センターからお母さんに電話する花子ちゃんのほっとした表情が「大変な事があったらここに行けば大丈夫！」という存在になっていた事がとても嬉しかった。

今日も雨が降っている。

「家にいるとストレスがたまる～」と、言いながら、傘をさして遊びに来る親子連れを迎える。雨の日は、私にとって特別な日だ。

わかちあい支えあって

山野 華鈴（神奈川県）
南足柄市岡本子育て支援センター

二人の子どもを連れ、ベビーカーや自転車で元気に歩き回る毎日。楽しく日々を過ごしているつもりでしたが、三歳後半の長女は自分の理屈を通そうとすることが多くなり、次女とのケンカもしばしば。私は注意や説明に言葉を重ね、苛立ちを覚えることが増えていました。ある日の買い物中、長女が激しくものをねだり、周囲を巻き込んでの大もめに。帰宅後、私はどっと疲れが出て、夕食準備がやっと。帰宅した夫に一時救われましたが、ストレスが芯に達していたようで、夜中に涙がこぼれ出すほどでした。

翌日、気分を立て直して子育て支援センターへ。馴染みのママ達に昨日の出来事を打ち明けながら、思わず声が潤んでしまいました。そんな私に「大変だったでしょ。泣いていいんだよ」「今、泣いちゃいなよ。家に帰ればまた二対一でやられるんだから」と、それぞれの個性で思いやってくれる言葉。一年前、アドバイザーさんの励ましに涙した事がありましたが、泣くのはそれ以来。とがっていた私の心が和らいだ瞬間であり、私の子育て生活は、ここで出会った人達に幾度となく支えられてきたのだと感じた瞬間でした。

その後、娘だって大変なんだという状況がよくわかるようになり、優しい気持ちと言葉で接するように努めました。お蔭で、お互いのとがった気持ちは消え、今ではあの一件は教訓めいた思い出になっています。

海の波が完全に止むことがないように、子育てに大変なことは尽きないと思っています。けれど、航海しているのは自分達親子だけではなく、実は周りに多くの仲間がいて、わかちあい支えあえるからこそ乗り越えられ、楽しく過ごせるのだと思います。これからも、ぶつかりあったり笑いあったり、時には支えてくれる人の胸も借りて、親子ともたくましく育っていきたいです。

はんぶんこ。

一緒に食べるとうんとおいしい！！

大村 華奈（福岡県）
飯塚市立頴田子育て支援センター

「おひさまひろば」は出会いの場

永野 美代子（福島県）
NPO法人しらかわ市民活動支援会「おひさまひろば」

久しぶりに戸外でのお出かけひろばに参加してくれたAさんは、晴れ渡った夏空の下、はにかんだ顔で私に話しかけてきました。

「お久しぶりです。私、最近ひろばに行ってないでしょ。実は、私、お友達ができたんです。一人だけなんだけどね、○ちゃんママなの。初めてこの人なら何でも話せるって思えるママ友。ひろばでたまに会うことがあって顔だけは知っていたので、最初は挨拶程度で、他にもいろんな人が居るから、その中の一人って感じで…。そのうちに何となく話すようになってね。そしたら、すごく自分と感覚が似ていて気が合うの。話しが弾むの。そして、思い切って『家に遊びに来ませんか』って誘ったら来てくれてね。家に誰かを誘うのは初めてで本当はドキドキしたの。最近はお互いの家を行き来するようになって楽しくて幸せなの。自分の子育ての悩みを話したら『わかるよ。私も同じだよ』と答えてくれたのがうれしくて」と今にもスキップをしそうな位の弾んだ声でのAさんの報告に、私の方が幸せな気持ちになりました。

「よかったね。一人でもいいんだよ。心を開ける友達が出来て本当によかった。教えてくれてありがとう」と、私も一緒に喜び合いました。

Aさんは出産直後から育児不安が強く、保健センターからの紹介で、約三ヵ月の赤ちゃんを抱き、緊張した顔でひろばに遊びに来ました。あの日から、もう一年半。ねんねの赤ちゃんは、歩くのが楽しくてたまらない元気な男の子に成長しています。まだ足どりはちょっぴり頼りないけれど、二十四歳のママは少しずつたくましくなり、そんな親子の姿を見守る事は私達ひろばスタッフの大きな喜びです。

「私、おひさまに出て行って良かった。おひさまのおかげで○ちゃんママに出会えたもの。おひさまがあってよかった。ありがとうございます」

そう言ってAさんはペコリと頭を下げました。彼女の笑顔の輝きは私に注がれたまぶしいほど暖かな「おひさま」の光でした。

ひろばのひだまり ～ありがとう～

とこちゃん（香川県）
NPO法人子育てネットひまわり　ひまわりはうすとことこ

当時、転勤先で子育てをスタートさせたばかり、多忙な夫に心配をかけまいと、がむしゃらに頑張る中、すがるような気持ちで訪れたのがひろばだった。友達がほしい、地域の情報がほしい。そしてなにより私の弱音を聞いてほしいという気持ち…「私がしっかりしてないと」とピンと張り詰めていた気持ちに疲れていた。そんな気持ちを溶かしてくれるような人に私は出会った。特別な何かが起こったわけではない。ただ、その人は私に微笑みかけてくれ、うなずきながら、私の話に耳を傾け、出会いを心から喜んでくれた。それがとても嬉しくて、この人なら甘えさせてくれると思った。会うたびに私は発見できない、息子の小さな成長を見つけ、私の些細なことを柔らかな表情でほめてくれた。それが心地良く、一緒にいると子育ての疲れや苛立ちが溶けていくようだった。その一言で…その笑顔で…救われた。

当時、私は母親になってまだ一年。「独りじゃ無理、誰か助けて」という思いでいっぱいだった。子どもの頃はいつも母が助けてくれた。「頑張れ」と励まし、「大丈夫」とエールをくれた。そんなことを思い出させてくれる、母のような人。私にとってひろばは「ひだまりのような人」に出会えた大切な場所だ。

地元に戻ってからも、時々メールが届いた。

「子育てサークルをはじめたと聞きました。Sくんも大きくなったことでしょう。きっと自慢のお母さんですね。私も元気をもらっていますよ」

離れても思ってくれる人だった。

そんな彼女はみんなの前から、突然逝ってしまった。信じられなかった。胸がグッとあつくなった。私の携帯には、今でも彼女の番号があり、メルアドがある。もう返事は帰ってこないけれど、今でも柔らかな日差しに包まれるとき、私はいつも彼女を思い出す。そして、息子の成長をそっと思い、「元気にやっていますよ」とそっと心の中でつぶやくのだ。

ぐっすり

遊び疲れた子どもたち。ママはお友達とゆったりお話。
子どもたちはママのお膝でぽかぽかお日様の光を浴びて
お昼寝。

伊知地 るみ（神奈川県）
NPO法人子ども・子育て応援ネット おやこのスペースわにわに

みんなが輝く親子の居場所

松村 由美子（長野県）
子育てサロン　おしゃべりサラダ

ママ達の「気軽に立ち寄れる親子の居場所があったらいいね」から始まったおしゃべりサラダ。日替わりメニューのように十人のスタッフが入れ替わりながら入ります。みんな子育て中のママ、自分の子育ての中からあれこれお話させてもらっています。

十坪しかないお部屋の中で、子ども達の遊ぶ姿を見ながら、おしゃべりが弾みます！「この狭さがいいんだよね～！　みんなが知り合いになれるよ」とうれしい言葉。ママから離れない子が、いつの間にかよそのママの膝につかまっていたり、絵本を読んでいたママの所に数人の子が集まっていたり…一対一での子育てでなく、みんなで子育てしているみたい。飾付けをしようと思っていたら「やりましょうか?」と手を貸してくれるママ、妊娠中のスタッフを気遣ってお手伝いしてくれるママ。健診帰りの妊婦さんが初めて来てくれた時には、皆がうれしい顔になり、ママ達は先輩ママとしていろいろ教えてくれました。子どもが入園し「ひとりだけど来ちゃった!」そんなママは、「抱っこしてあげるよ」と赤ちゃん連れでトイレに向かおうとしたママに声をかけてくれたり、遊んでくれたり…　どれもどれもうれしい姿です。

子ども達の成長もたくさん見せていただいています。子どもの初あんよの瞬間には、そこにいたみんなが拍手でした。おとなしかった二歳児が泣いて怒る姿に困り顔のママ、「大事な瞬間だよね」と見守り合うママ達の姿も…　子ども達の成長もうれしい事ですが、その成長を皆で見届け喜びあうママ達の姿がまた、素敵だなと思います。

子どももママもスタッフも、ひとりひとりが大事な存在です。みんなが主役、みんながサポートしあえる仲間だなと思うこの頃です。おしゃべりサラダは、八年を経て「気軽に立ち寄れる親子の居場所」から、「みんなの力でみんなが輝きあえる親子の居場所」になってきたのかもしれません。

また行こう　また遊ぼう

みけ（東京都）
武蔵野市立0-23吉祥寺

すべり台　最初は
こわがっていたよね
今では一番のお気に入り

よちよち歩きで
遊んでいたけど
今では　おもちゃまで走ってゆける

長いようであっという間
大変だけど面白い
あなたとこうして過ごす時間は…

さあ行こう　出かけよう
可愛い笑顔が見たいから

また来よう　また遊ぼう
あなたも私も笑顔になれるから

わらべうた　うたった日は
お母さんより
しっかりと　覚えていて　驚かされたり

大好きなプチトマト　お弁当に詰めて
リュックでしょったならピクニック気分

泣いたり　笑ったり
怒ったり　抱きしめたり
色々あるね　あなたと過ごす時間は…

さあ行こう　くつはいて
友達たくさん出来るかな

また来よう　また遊ぼう
手をつないで　約束　帰り道

また行こう　また遊ぼう
大きな未来へつながる　その場所へ

また会いたいね

小川 志津子（福島県）
国見町地域子育て支援センター

ただここにいて一緒に過ごしてみよう
天使達はいつの間にか手を取り合ってるよ

がんばらなくてもいいんだ
「出逢い」はつくるものじゃなく
気づけば　そばにあるものだから

また会いたいね
心をあたためよう
新しい明日のために

ただここに来てみるだけでいい
天使達は歌うように翔ぶように走るよ

かかえていたいろんな思い
不思議にわかり合えるね
同じ道　迷ったり　笑ったり

また会いたいね
悩みは　消していこう
新しい明日のために

あ～　たのしかった♪♪♪

夏本番★『子夢の家』の広い庭にはプールが登場します！
子どもたちの楽しそうな笑い声が響きわたる毎日。ママたちもプールを囲んで、自然と色んなママとお話ができる素敵な時間です。時にはパパも参戦！！　スタッフも参戦（笑）
初めての水遊びに小さい水着。この日の思い出を大切にして欲しいと願った一枚です。

よね（香川県）
NPO法人子育てネットくすくす 子夢の家

「子育てひろば0123育ちの詩」を通して

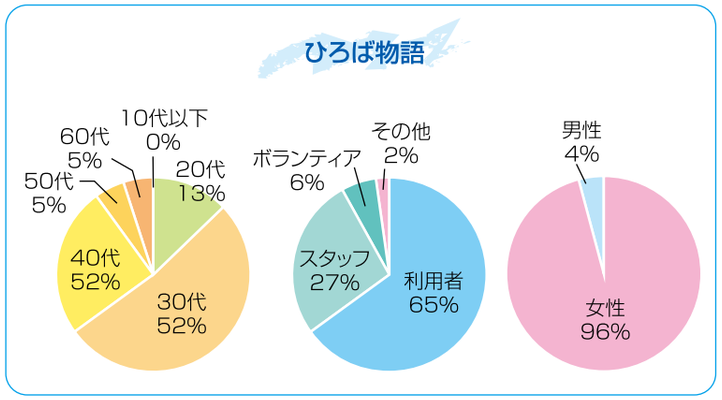
応募作品について

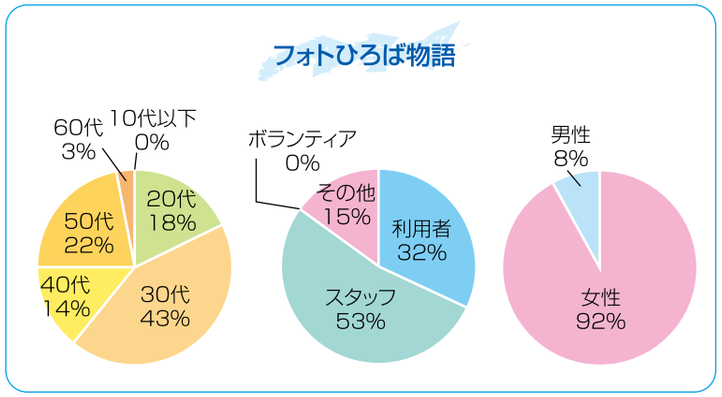
2010年7月から10月の約3ヵ月の間、新たに「ひろばの詩」部門を加えて募集した結果、「ひろば物語」98作品、「フォトひろば物語」63作品、「ひろばの詩」60作品が全国から寄せられました。

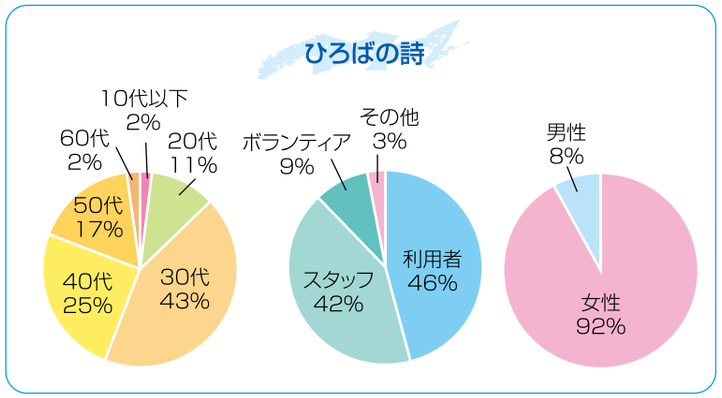
その中から、12月1日の審査委員会において、「ひろば物語」23作品、「フォトひろば物語」13作品、「ひろばの詩」9作品の入選が決定しました。

都道府県	ひろば物語	フォトひろば物語	ひろばの詩	合計
北海道	2	1	0	3
青森県	1	0	0	1
岩手県	1	0	1	2
宮城県	2	0	1	3
秋田県	0	0	0	0
山形県	4	0	0	4
福島県	2	8	5	15
茨城県	0	0	0	0
栃木県	0	0	0	0
群馬県	0	0	1	1
埼玉県	4	2	2	8
千葉県	6	1	0	7
東京都	5	0	5	10
神奈川県	14	4	3	21
新潟県	4	7	2	13
富山県	0	0	0	0
石川県	6	1	1	8
福井県	2	0	0	2
山梨県	0	0	0	0
長野県	3	0	1	4
岐阜県	3	7	0	10
静岡県	2	1	2	5
愛知県	6	0	3	9
三重県	1	7	1	9
滋賀県	2	0	0	2
京都府	1	0	1	2
大阪府	3	6	2	11
兵庫県	0	0	2	2
奈良県	0	1	1	2
和歌山県	1	1	0	2
鳥取県	0	0	0	0
島根県	0	0	0	0
岡山県	3	4	7	14
広島県	2	0	3	5
山口県	1	0	1	2
徳島県	2	0	1	3
香川県	4	7	7	18
愛媛県	0	0	0	0
高知県	0	0	0	2
福岡県	3	1	1	5
佐賀県	0	0	1	1
長崎県	1	1	0	2
熊本県	1	2	2	5
大分県	1	0	0	1
宮崎県	0	1	1	2
鹿児島県	2	0	2	4
沖縄県	3	0	0	3
合　計	98	63	60	221

応募者の内訳







審査員プロフィール・総評

審査委員長　新澤 誠治

下町にある「神愛保育園」に1958年園長として就任。園長40年の歩みの中で障害児保育、延長、産休明け保育、地域活動、子育て支援センター活動など先駆的に取り組む。1999年4月より「江東区子ども家庭支援センターみずべ」所長として3年間、子育て支援の実践と理論化につとめる。
2000年4月より東京家政大学　育児支援科の教授に就任し、2006年3月定年退職。
現在は子育て支援推進センターみずべの会代表、神愛保育園・みずべグループのスーパーバイザー、全国子育て支援センター　実践研究会の委員長、NPO法人あいぽーとステーションの代表理事として「子育て・家族支援者」の養成講座に携わる。
主な著作として『私の園は子育てセンター』小学館、『子育て支援　はじめの一歩』小学館等。

「育ちの詩」の募集も2回目となり、今回も沢山の人から体験談が寄せられ、初めての赤ちゃんとの出会い不安と緊張のなかにいる母親、孤立した中で独り子育てを担いストレスをためている姿などが子育ての現状が臨場感をもって伝わってきます。

一方、子育てひろばに来て、スタッフのやさしいまなざし、何気ないあたたかな一言で迎えられ、多くの子育て仲間と出会い、その輪の中で分かち合い、支え合う姿も見ることができます。「自分は一人でない、支え合う仲間がいる、見ていてくれる人がいる」とつながりの中で、孤独から救われ、「一歩前に踏み出すことができた」という母親の声が聞こえ、子どもたちのはつらつとした姿が見えてきます。

また、父親たちのひろばへの参加と交流とか、利用者としてきた母親が援助者になりスタッフになった人もいて、活動が継続してくると子育ての、循環性ができてきたことを感じます。外国人の母親のひろばへの参加等、これからの姿をみせてくれる記録も垣間見ることができました。

ボランティアやスタッフから、「一人ではない大丈夫」「つながりをつくるみんなのひろば」にしていこうと言うような力強いメッセージも伝わってきます。

いま「個から孤の時代」と言われ、地域の中で人と人のつながりが希薄になり、家に閉じ込められ、一人で子育てを背負うことに追い詰められる状態の中で人と人のつながりをつくりだしていく「子育てひろば」とは何と素敵なところなんだろうかと感じ、改めてひろばの存在の意義や役割を認識させられました。

この「育ちの詩」を是非、子育て中の父母やひろばのスタッフ、また子育て支援に携わる国、自治体の担当者に読んでほしいと思うと共に、「子育てひろば0123育ちの詩」の記録の活動が継続して行われ、もっともっとたくさんの記録が寄せ集められることを切に願います。

審査員　おち とよこ

ジャーナリスト、作家、高齢問題研究家。介護や医療、教育、育児、暮らし、それにまつわる家族、女性問題を中心に、新聞、雑誌、書籍への執筆のかたわら、講演、テレビ等に出演。国や自治体委員を歴任。主な著書に「一人でもだいじょうぶ　晴ればれ冬じたく」日本評論社、「入院・介護SOS」創元社、「現役世代のための介護手帖」平凡社新書他、「生活図鑑」「料理図鑑」「ただいまお仕事中」福音館書店など絵本、児童書も多数。

ぐっすり、子育てひろばの日だまりで、ママの膝枕で眠る顔…。「フォトひろば物語」の作品からは、子どもたちの姿と共に、ママたちの楽しそうな会話やパパの息遣い、高校生の笑い声や外国語までもが聞こえてきます。

また「ひろば物語」の行間からは、ピンクのソファーで思わず眠ってしまった双子のママを見守るスタッフの細やかな心づかいや、遅くて心配だった最初の一歩を共に涙ぐむ温もり、異国や転勤先での孤独な育児を癒す空気や「ここに行けば大丈夫！」と、ひろばを卒業した子どもたちが雨宿りにもやってくる安心…。そんな年齢も性別も国籍も多様な人と人、人と土地、人と情報、人と時の掛け橋になっているひろばの素顔が浮かんできます。

そしてひろばは、「ただここに来てみるだけでいい」「また会いたいね」と詩いたくなる場。多彩なひろばの魅力を伝える作品の数々に、いつしか心はホカホカ、目頭キュン。選ぶ辛さに胃までがキューン…。

審査員　きたやま ようこ

1949年、東京生まれ。「ゆうたくんちのいばりいぬ第1集」講談社出版文化賞絵本賞、「りっぱな犬になる方法」産経児童出版文化賞推薦、「じんぺいの絵日記」と共に路傍の石幼少年文学賞、「いぬうえくんが　わすれたこと」産経児童出版文化賞産経新聞社賞を受賞。「うわさのようちえん」講談社、「おにのこあかたろう」偕成社、「あっぱれぱんつ」あすなろ書房、他著書多数。

どの作品も甲乙つけ難く、お母さんや子供たちの、泣き声や笑い声が聞こえてくるようでした。

『いかに救われたか』という、支援センターの素晴らしい役割と必要性を語って下さった作品が大多数でしたが、その中で、『支援センターのおかげで何人かの仲間が出来、支援センターを離れて個人的な付き合いと助け合いに発展していった』という内容の作品がありました。支援センターを基盤にした発展的な輪として印象に残りました。

何か一つエピソードを聞かせて下さると、センターの様子が具体的に浮かび上がり、それぞれの作品のメリハリにもなると思いました。

今回残念だったのは、内容がとても良かったのに文字数オーバーの作品が何点かあったことです。

審査員　柴田 愛子

1948年、東京生まれ。保育歴37年。東京都の私立幼稚園で10年間幼稚園教諭を経験した後、1982年、「子どもの心により添う」を基本姿勢とした「りんごの木」を発足。以来27年間、子どもと遊び、子どもたちが生み出すさまざまなドラマをおとなに伝えながら、子どもとおとなの気持ちのいい関係づくりをめざしている。実際に子どもにあったドラマを絵本にしている。保育、講演、執筆、と様々な子どもの分野で活動中。

たくさんの方々の物語、写真、詩を拝見しました。2年目ともあって皆さん腕を上げられ、選ぶのにこちらがお手上げ状態でした。

スタッフの方の応募も多く、この場での出会いは親子だけではなくスタッフにとっても自らを潤す場になっていることを感じました。さらに、父親達、祖父母、外国の方、ボランティアの若者、ここを巣立っていった子ども達までもが出入りする場になりつつあることに「ひろば」や「センター」の広がりを感じ、驚かされました。「ひろば」や「センター」が地域の居場所や仲間づくりの基地となって育っている気配を感じます。なんとも喜ばしいことです。地域に〝ありのままの子どもがたむろできる場所が必要〟と強く思ってきた私ですが、ありのままの自分の居場所を必要としているのは子どもばかりではありませんでした。ますます、地域の〝へそ〟となって枝葉が伸びていくことを願っています。

審査員　新沢 としひこ

1963年、東京生まれ。シンガーソングライター。子どもたちが歌う歌をたくさんてがける。作詞した「世界中のこどもたちが」（作曲･中川ひろたか）は、小学校の音楽の教科書に採用になっている。他に「さよならぼくたちのほいくえん」（作曲･島筒英夫）、「ともだちになるために」「はじめの一歩」（作曲･中川ひろたか）など卒園ソングの定番になっているものも多い。かつてりんごの木こどもクラブで柴田愛子と一緒に保育していたことも。

前回は、今まで心の中でためていた思いがあふれてしまっているようなものが多く、なるほど、と深く感じ入りました。今回はどうであったかというと、全体の印象がずいぶん違いました。みなさん、ずいぶん落ち着いていらっしゃる。子育てひろばの様子を、非常に分かりやすく、コンパクトにレポートしてくれているものが多かったのです。前回は、審査員も読んでいて涙が出て困りました、と言っていましたが、今回はくらべると大変読みやすかったと思います。

印象としては、感動が淡泊になったという感じですが、それはきっと、成熟していく一つの過程なんだな、と思います。「子育てひろば」との出会い、自分との関係など、をちゃんと客観的に受け止めたり、分析したりして、それを誰か他の人に伝えたい、という姿勢が伺えます。それは素晴らしいことですね。

次は、もっとその中から、自分だけのドラマを熱く語って欲しいと思います。そういった熱い作品を、また期待したいです。

審査員　中橋 恵美子

NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会理事
NPO 法人わははネット理事長
一般社団法人全国子育てタクシー協会理事
香川県内で子育てひろばを 3 拠点運営のほか、子育て情報誌や携帯電話での情報発信事業などを行っている。自身も 3 人の子育て中。

先日、運営している子育てひろばに、二人目の出産のお手伝いに他県から来たおばあちゃん（お母さんのお母さん）が上のお孫さんを連れて遊びに来ました。

「いつも娘から電話で話を聞いていた子育てひろばに一度私も来てみたくて。県外に嫁がせて娘が育児で悩んでないか、孤立してないか心配ばかりしていましたが、ここに来るようになって娘だけでなく私まで救われているのですよ。本当にありがとう。私も他の子育てしている人みんなに、ここの存在を教えてあげたいわ！」と言っていただきうれしく思いました。

昨年に続き、子育てひろば0123育ちの詩の選考をさせていただきましたが、去年と比べ具体的な自分の体験やエピソードの一つ一つを披露するよりも、このおばあちゃんのように、まわりにこの存在や機能を説明したい！教えてあげたい！と思うようになっているママたちの気持ちが伝わる半面、目を閉じれば、文章の出来事がパーっと映像になってイメージできる作品が減ったように感じました。少しさみしいですが、これも地域子育て拠点が少しずつ浸透してきたからなのかな。

座談会

～作品を通して伝えたい子育て家庭の声、支援者の関わり～

審査後、作品を通してみえてきた地域子育て支援拠点の役割について審査員に語っていただきました。

＜審査委員長＞
新澤誠治（子育て支援推進センターみずべの会代表）

＜審査委員＞
おちとよこ（ジャーナリスト、作家、高齢問題研究家）
きたやまようこ（絵本作家）
柴田愛子（りんごの木子どもクラブ代表、絵本作家）
新沢としひこ（シンガーソングライター）
中橋恵美子（NPO法人子育てひろば全国連絡協議会理事）

＜司会＞
奥山千鶴子（NPO法人子育てひろば全国連絡協議会理事長）

平成 22 年 12 月 1 日加瀬ビル第 2 会議室　撮影：角田武／構成：武居智子

親子と地域をつなぐ通過点

中橋　今年は、具体的なエピソードよりも「ひろばは素敵な場所だからぜひ来て」といった思いを伝える作品が多かったですが、それは子育てひろばへの愛着のあらわれのように感じました。

きたやま　昨年は、母親たちの感情がストレートに伝わる文章が目につきましたが、今年はスタッフからの応募も増え、全体を通して子育てひろばの良さが見えてきて、それぞれの土地でそれぞれの場として育っていることがよくわかりました。

おち　今年は、孤独な子育てに苦しんでいる母親だけでなく、父親や祖母や外国の方、転勤族や双子の母親などいろんな利用者の顔が見えてきましたね。

おちとよこ

柴田　ようやく『地域にあるのが当たり前』な存在になってきたのでしょう。しかしその一方で、「人の輪に入れない」といった相談も増えています。そんな不安にこたえるようなエピソードがもっとあればいいなと思いました。

新沢としひこ　人見知りの人だけでなく、年齢や言葉の違い、地域性といったハードルがあり、それをどう乗り越えるかが、子育ての中でひとつの課題になっていますよね。

奥山　今年も「独りで不安を抱えていけど行って良かった」といった文章が出ており、昨年、多くの作品に語られていた『扉を開ける瞬間』の不安を、まだまだたくさんの母親が抱えていることに気づかされました。その見えない壁をなくしていくことが、子育てひろばの大きな課題ですね。

新沢としひこ

おち　今年は、扉を開けた後のさまざまな感じ方も見えてきて、子育てひろばが母子だけの場ではなく、まさに『人と人をつなぐ地域の拠点』になっていることを強く感じました。

新沢としひこ　巣立った子どもやボランティアの視点も見えてきて、隅っこの小さなエピソードが積み重なって子育てひろばが成り立っていることがよくわかりました。

奥山　子育て支援の事業が始まって10～20年の間に、通っていた子どもが成長し、母親はスタッフになり、そこからまた新たなエピソードが出てきましたよね。子育てひろばをきっかけに地域の生活にはじめるようになったという作品がありましたが、子育てひろばは、「親子と地域をつなぐ通過点」でいいのだなと改めて思いました。

お父さんも交わって

新澤誠治　作品を読んで、子育てにストレスを感じている母親が多い中で、子育てひろばがその一人ひとりの想いに応えた働きをしていることに、改めて感心しました。昨年は子育て支援の政策で子ども手当などの「現金給付」か支援サービスなどの「現物支給」かが話題になりましたが、やはり「現物支給」が大事ですね。また、「イクメン」が話題となり、父親が参加し交流会や絵本の読み聞かせを始めたという記録もありましたね。おばあちゃんも登場し世代間交流もあり、新しいひろばができてくる兆しを感じますね。

新沢としひこ　確かに『イクメンブーム』を象徴するように、文章にも写真にも父親が主役の作品が出てきましたよね。

柴田　実際、育児休暇をとる男性は増え、「最初は会社が恋しかったけど、子育ての日常の中で効率を考え、家事や育児がついに仕事になった」といった父親の声を耳にするようにもなりました。

新沢としひこ　昔は所帯じみたイメージをもたれるからと、男性は滅多に育児の話をしませんでしたが、今は堂々と「家族が大事」と言えるようになりましたね。

奥山　夫と子育て支援センターで待ち合わせる作品がありましたが、実際、週末は父親の姿が増えています。子どもは勝手知ったるひろばで違和感なく遊び、父親は新聞を読んでいるといった光景も少なくありません。

中橋　受け入れる側も、もっと構えずに父親を受け入れることが大事ですね。

新澤誠治　育児に参加する若い男性が増えている一方、夫や舅の理解が得られず、まだリフレッシュ一時保育に子どもを預けることを「お前は子育てが仕事なのだから」と反対される例もあります。子育てひろばの活動がこうした偏見に新たな風を吹き込んでいく希望を感じています。

新澤誠治

奥山　子どもがケガをしたら夫に「専業で見ているのにダメじゃないか！」と叱られたという声も時々耳にします。

柴田　まだまだ子どもの日常を知らない父親が多いのよ。

奥山　子育てひろばに来てどんどん子どもたちに関わってほしいですね。

柴田　ただボーッとしているだけでもいいのよね。父親が居るだけで場の雰囲気がゆるむことがあります。比較的キチッとした母親たちの中で、子どもたちにとってホッとできる存在なのかもしれません。

新沢としひこ　男性には、子どもみたいなところがあるので、例えば、一人でブロック遊びをしている男児の隣で、一緒に黙々と遊ぶうち、その子の隠れた個性が見えてきたり、友達のように響きあうものを感じたりすることがある。子どもへのアプローチが、女性とは違うからいい。自分が夢中になりすぎちゃ困るけど、そのままで子どもたちに接してほしいと思います。

誰もが自然体でいい

奥山　写真や文章から見えてきた子どもの様子はどうでしたか？

柴田　ぐっすり眠っている子どもの写真が印象的でした。飾らない自然な雰囲気がいい。

きたやま　ひろばで思いっきり遊んだことが伝わってきますよね。

中橋　ボランティアの男子中学生が子どもの頃、子育てひろばで「大事にしてもらった」と書いていた言葉も印象的でした。自分の居場所だと子どもに思ってもらえることは、素晴らしいことですね。

新沢としひこ　以前通っていた子どもが雨宿りに立ち寄る話にも、子どもが安心できる場だと思っていることが伝わってきました。

きたやま　幼くても自分に関心を持ってもらったことは、ちゃんと心に残っているのよね。

新沢としひこ　母親がいつもより優しくなれる場所では、子どもも安心して眠ってしまう。母親にとって居心地のいい場であれば、子どもにも心地いい空間として記憶に残るのでしょう。

奥山　乳幼児たちが遊んでいる写真からは、言葉を交わさない子ども同士、あうんの呼吸でコミュニケーションしていることが伝わってきました。

柴田　言葉でしかコミュニケーションとれないのは、大人だけなのよね。

新沢としひこ　だから、無口な父親が居てもいい。不器用な方が、子どもとうまくコミュニケーションとれる事もあります。スタッフや実習生の中にもおとなしい人がいていい。みんなが元気印だと、逆に子どもが引いてしまうこともあります。

柴田　作り笑顔だと、すぐに子どもに見抜かれてしまう。

中橋　笑顔だけがいいわけではなく、いろんな人のいろんな顔があっていいのよね。

中橋恵美子

奥山　笑顔を安売りにしない『クールビューティー』がいていい。子どもも大人もみんなが自然体で居られることが大事ですね。

育ちと向きあい学びあう

新澤誠治　緊張している母親を迎えるには、やはり笑顔が大事ですね。「大丈夫」「心配ないよ」と、援助の言葉を投げかけているのは大切なことだなと思いました。作品に登場する子育てひろばを見ていると、人との関わりがつくりだされ、スタッフとの出会い、子育て仲間との出会いから、新しいドラマが生まれてくるのを感じます。

新沢としひこ　作品の子育てひろばには、「こうしなさい」がない。利用者が「こうじゃなきゃダメ」と思い込んでいるところに「いいのよ」といった寛容さでその想いも受けとめている。それがとても大事だと思います。

きたやま　子どもだけでなく親たちも、自分の存在を認めてもらうことを求めているのよね。

おち　多くの作品から、傍らに寄り添って共感してもらい、いつの間にか元気になっていくような自然なサポートが感じられます。それはとても大切なことだと思いますが、いくつかの作品に出てきた「していただく」という言葉に、何か支援を与えてもらう場のような利用者とスタッフの関係性が見えてきて、少し気になりました。

きたやまようこ

柴田　最近、人見知りの母親から「子育てひろばのような場所で遊ばせないと子どもがかわいそうですか?」と質問されました。行かせないと遊ぶ力がつかないと思い込み、不安を募らせているんです。

柴田愛子

新澤誠治　「危ないからダメダメ」という親がいたり、一方、子どもが大暴れしているのに、「今、自我を発揮しているから」と止めず、叱ることをしない親がいます。逆に、子育てに自信が持てずに萎縮している親も少なくありません。

柴田　保育の現場でも、「何でも子どもの言う通り」という親が増えています。子どもとの接し方を知らずに親になり、発達理論などの情報から、頭で子育てしようとしている人が多いです。現代の子育ては、子どもに関心のない親がいる一方で、何でも子どもの言う事を聞いてしまうような両極端な問題があるのかもしれません。

おち　孫のわがままに何でも応えてしまう祖父母も増えていますよね。また、今の育児に合わせないといけないと思い込んでいる祖父母も多い。

きたやま　いろんな考え方があることを知ることが大事よね。

奥山　子ども同士が交わる中で、そこから育て方をみんなで一緒に学んでいってほしいですね。

飾らない『あなたの物語』を

おち　育児や子どもに関する情報が溢れる中で、誰もが気張らず自然体で居られる場であることは、とても大事だと思います。今回、始めた詩の部門の作品には、「子育ては素晴らしい!」と謳い上げるような作品が目立ちましたが、実際の子育ては、素晴らしいことばかりではないですよね。さまざまな苦労がある中に、楽しさが見えてくる。ドラマのような絵に描いた幸せはなくても、日常の小さな出来事の中に、物語があると思います。

新沢としひこ　何でもない日常の中で、少し笑えたり、泣けたり。その小さな感動が、利用者の分だけ詰まっているのが、子育てひろばだと思います。心情を素直にあらわせるのが、詩の良さです。文章も、全部伝えようとしなくていい。失敗談でもいいからワンエピソード、『あなたの物語』を届けてほしいですね。

きたやま　次回の募集には、そんな一言を添えてもいいかもしれませんね。スタッフの文章も、「こうあらねば」といった概念に縛られず、それぞれの想いやり方がバラエティに見えてくるといいなと思います。

子育てを支える人たちと親の声を継続して伝えていくことの大切さ

新澤誠治　つまずくことがあってもいい。子育てには、ちょっとした日常の中で得られる喜びがたくさんあります。子どもの成長を家庭でも地域でも、しっかり見続けてほしいですね。今後は、発達に不安があるなど気になる子どもの受け入れや、「リフレッシュひととき保育」(一時預かり制度)などの新たな芽も、見えてくることを期待しています。子育てひろばの歴史は浅く、このような記録をまとめる機会は、これまでありませんでした。保育園では、記録は重要な仕事のひとつです。それぞれのひろばでも話し合い、記録を積み重ねて下さい。また、ぜひこの事業を継続して、子育ての生の声を、全国の親やスタッフはもちろん、議員や行政の方々にも届けてほしいと思います。

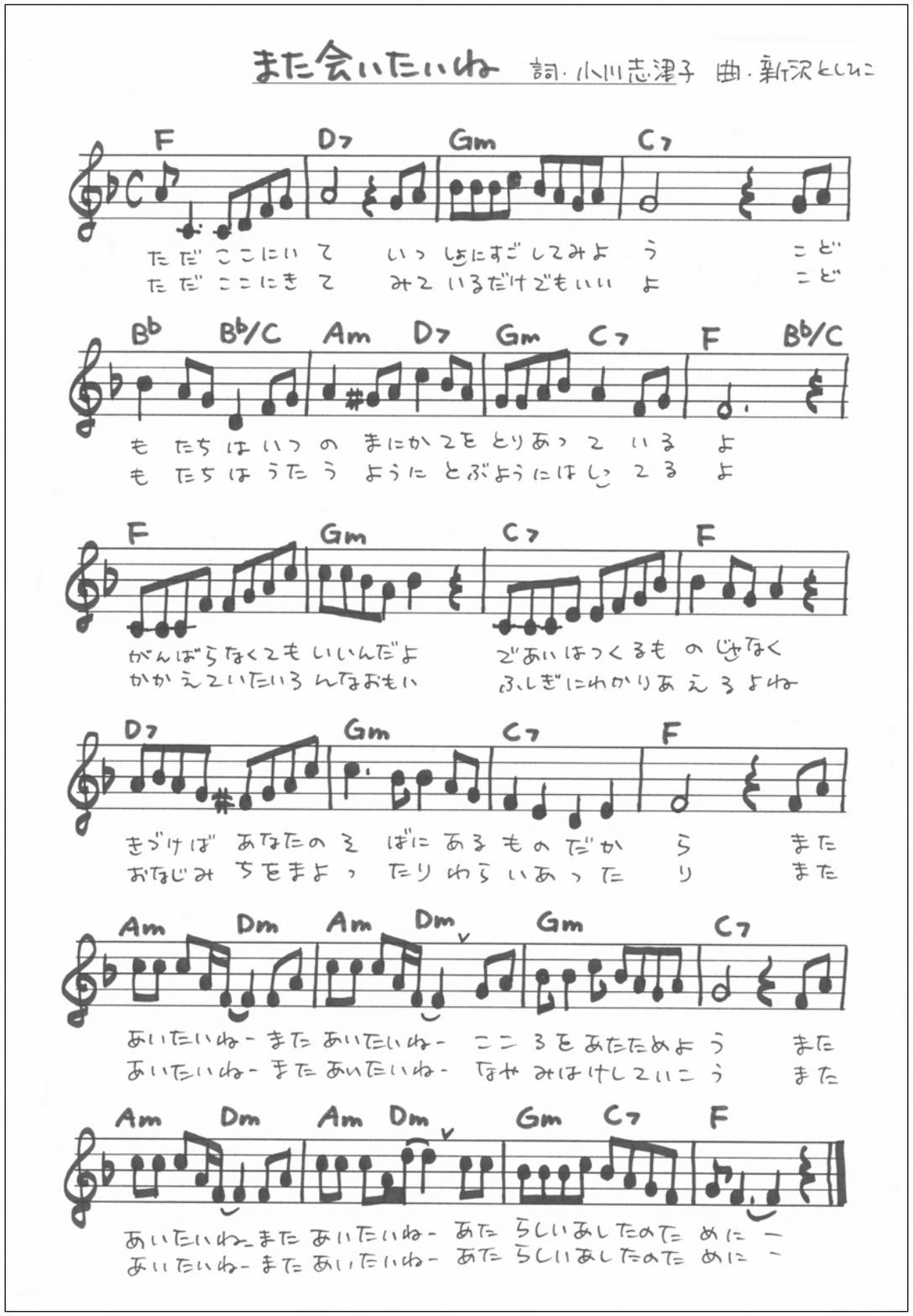
新沢としひこ　作品から、昨年の作品集を読んで「私も」という想いで書いて下さったことが伝わってきました。2回続けたことで、この事業が重層的な企画だとわかり、継続することの大切さを痛感しました。回を重ねる度に、また違う変化や課題が、見えてくると思います。そして、さまざまなエピソードを積み重ねることで、より多くの人に「悩んでいるのはあなただけじゃない」と伝えることもできるでしょう。

きたやま　同じ事を、積み重ねることに意味がありますね。

新沢としひこ　保育資格の取得に目覚めた父親の話など、その後が気になる作品もたくさんありました。ぜひ、みなさんも書き続けて下さい。

奥山　子育てひろばも、この「子育てひろば012 3育ちの詩事業」も、まだまだこれから。お寄せいただいた声を活かして、さまざまな人が子育てに参加し、親子が地域社会へ育っていけるような場を、今後も全国に広めていきたいと思います。

奥山千鶴子



編集後記

「子育てひろば0123育ちの詩」事業も、2年目を迎えました。今年度の作品募集では「ひろば物語」「フォトひろば物語」に加えて「ひろばの詩（うた）」部門を新たに設け、たくさんの作品を全国からお寄せいただきました。

中には全国の子育てひろば・支援センターに関わっていらっしゃる方々、育児休暇中の方や多胎児の親、父親、外国人の方などのご応募のほか、ひろば・支援センターを卒業された小学生や、中学生の方のお話も応募いただきました。

ひろば全協では、この作品集を通じて、子育て当事者の生の声や子育て支援に関わる方の想いを社会に発信していくとともに、これからの子ども・子育てに関する新たな行政施策にもぜひ反映していただきたいという思いがあります。既存の価値観で子育て家庭を捉えることなく、子育て家庭の多様なニーズを国や自治体に届けていくためにも、この作品集をきっかけにこれからの子育て支援に必要なことを多くの方に一緒に考えていただければと願っております。

最後になりましたが、この事業に関わってくださった子育てひろば・支援センターの皆様、ひろば全協会員の皆様、審査委員の先生方に心から感謝申し上げます。

NPO法人子育てひろば全国連絡協議会
子育てひろば0123育ちの詩　事務局

第2回 子育てひろば0123育ちの詩

～聞かせて！子育てひろば・支援センターで出会ったちょっといい話。～

平成23年2月発行

独立行政法人福祉医療機構　社会福祉振興助成事業

発行：NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会
〒222 - 0037　横浜市港北区大倉山 3−19−18

TEL：045−531−2888　FAX：045−512−4971

http://kosodatehiroba.com

表紙・本文イラスト：相野谷 由起　本文イラスト：酒井チエ子

編集・デザイン：企業組合エコ・アド
※本誌の無断コピー、転載を禁じます。

発行　NPO法人子育てひろば全国連絡協議会